

新任のご挨拶

関西学院大学総合政策学部 助教 九島 佳織

今春、本学部国際政策学科の助教に着任しました。専門は比較政治学及び国際関係論で、「国際関係論」をはじめ国際政治分野の授業を担当しています。

私はこれまで、革命やクーデタといった制度外の行為による体制変動を中心とした民主化研究を行ってきました。民主化には複数の経路が存在します。代表的なものとして、複数政党制の導入や政治的・市民的自由の権利拡大に伴う独裁者主導の政治的自由化、独裁者の選挙での敗北による政権交代、軍が文民政治家に権力を移譲する民政移管がありますが、これらの経路の場合には公的制度に則って（基本的に）平和裡に民主化が実現します。他方、革命やクーデタは政権に不満を持った一般大衆や軍による蜂起であり、制度上の手続きを経ずに強制的に独裁者を権力の座から引きずり下ろします。つまり、何百万人もの人々が首都の広場に集い独裁者に退任を迫ることで、独裁者は国外への亡命や辞任を余儀なくされるわけです。このような制度外の体制変動によって権力の座に就いた指導者は、自らの行為をどのように正当化するのだろうか。独裁者を倒した後、本当に民主化するのだろうか。新たな指導者はどのような政策を執り行うのか。こういった問題意識から、私は体制変動後の体制構築過程に注目して理論的な研究に取り組んでいます。

私は2016年3月に本学部を卒業し、大阪大学と東京大学の大学院に進学して学位を取得後、東京大学での助教職を経て、母校に戻ってきました。現在は「研究者」として日々研鑽を積んでいますが、学部時代は実務に興味があり国際協力の現場に魅了されていました。当時、長期休暇には国際ボランティア活動や大学のプログラムであるインドネシア交流セミナーに参加して発展途上国を渡り歩き、現地の人々と交流することで刺激的な経験を得ることができました。まさに、“Think Globally, Act Globally” に忠実だった時代です。こうした経験を培う中で、私は一つの疑問を抱きました。それは、若い同世代の大学生が自分たちの国を変えたいという強い意欲を持っていて、市民社会組織の活動が盛んであるにも関わらず、なぜ国家は自由で民主的なものへと生まれ変わらないのだろうか、ということでした。今思えば、これが私にとっての「学問」との出会いだったのかもしれません。それ以降は研究者を目指して大学院に進学し、理論構築型の研究に興味を持ったことで、私のフィールドはいつしか海外から院生室の机に変わりました。現在もその傾向は変わることなく、「いつでも大学の研究室にいる人」になっています。

今は母校での新生活を謳歌しつつ、かつての自分自身のように国際社会で実践的に活躍したいという夢を抱いた学生が多く在籍する総合政策学部で、理論重視の自身が何を教えられるのだろうと悩む毎日です。ただ、少しでも「学問」の楽しさを伝えられたら良いなと思いつつながら、授業をしています。これからよろしくお願ひいたします。